

小学校受験を目指すご両親へ

僕はこう思う、私はこうしたいと、自由闊達に言えるような子どもを育てたいというのが、我々の夢です。



国立学園小学校校長
守屋義彦さん

——こちらの教育目標は「自ら考え、自ら学び、自ら行動する」です。あまり口出しをしない子育てが必要でしょうか。

守屋 ええ、見守るという姿勢が大事だと思います。

——今の子どもの多くは「自ら」の部分がスポイルされていると言ったら大袈裟ですが、あまり刺激されていないのではないかと思います。その辺、どうお考えですか。

守屋 まあ、「自ら考え、自ら学び、自ら行動する」というのは、そういう子どもに我々が育て上げるということであって、最初からそういう下地が十分にできている子どもはいないと思います。

——見守るだけで、子ども達は「自ら考え、自ら学び、自ら行動する」ようになりますか？

守屋 むろん、見守るというのは基本的なスタンスであって、要所要所で自ら考えるためのキッカケをつくってあげる、あるいはタイミングよく関わっていくことが必要です。子どもが夢中になって遊んでいるときに、はい、お片づけをしましょうと強制的にやめさせるのは好ましいとは思えませんが、かといって、遊びに飽きてガラガラし始めてから声を掛けたのでは遅すぎます。子ども達の様子を注意深く観察して、頃合いを見計らって、そろそろ片づけようかと声をかける、そういう一歩踏み込んだ指導というか働きかけが必要な場合も当然あります。見守ると放任とは違いますからね。

——先生方には、子どもというのは何を考え、どんな行動をとるのか、その辺を見極める眼力が必要のようですね。

守屋 そうですねえ。口出しをしたいと思っても、ぐっと奥歯を噛みしめて我慢しなければならないときもあるし、一方、見守るだけでなく、タイミングよく働きかけなければならないのですから、責任が重いと思っています。

●ペーパーを利用した一問一答式の個別テスト

——入試はどう行われますか。

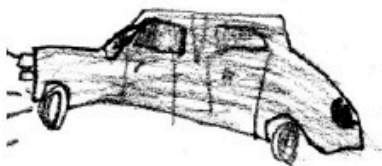
守屋 1つの教室に10数人の子どもを集めてテストをします。どんな形式のテストかという、普通の授業をイメージしていただけるとわかりやすいと思います。学級担任の役割でテストが1人、その補助をする教師が4名つきますが、むろんこの補助の先生は入試のときだけです。



テストが子どもたちに質問します。例えば、何かのお話をして、「キツネさんは、そのときどんな顔をしたと思いますか。手元のペーパーを見て、きっとキツネさんはこんな顔をしていると思った顔に○をつけましょう」といった問題を出します。手を挙げた子どものところに補助の教師が行って、その子の答えを聞きます。答えが1つしかないという問題とは限りません。自分の考えを相手にわかるように説明できればそれが正解です。ペーパーを使っていますが、ペーパーを利用した一問一答式の個別テストとお考えいただいたほうがわかりやすいと思います。

——ペーパーテストとは違うという意味合いをもう少しお話しください。

守屋 ○×式で、できた・できないだけで合否を決めるという方法は、小学校受験には不向きであることは誰でもわかっていると思います。こういうテスト方法で入試をクリアしてきた子というのは、自ら学び、自ら考え、自ら行動するという私どもの教育方針にはやはり馴染みにくいのです。ワクワクしながら授業を受けて、僕はこう思う、私はこうしたいということが自由闊達に言えるような子どもを育てたいというのが、我々現場の教師の夢です。それにはどんな入試方法がいいのか、いろいろと検討を重ねて現在の形になったというわけです。だから、みなさんがイメージしているようなペーパーテストとは全く違うものです。学校説明会のときにも、プリントがいっぱい配られるので、ペーパーテストの学校というふうに思われがちだけれども、そうではありませんと念押しをしています。知育面だけでなく、授業スタイルのテストの中でトータル的なものを見るということです。



——答えがわかっているでも手を挙げるのが恥ずかしいという子もいると思います。元気よく手を挙げて、元気よく発言できる子が有利ですか。

守屋 まあ、こちらから質問を投げかけたときに、パッと反応できる子と、答えはわかっているけれど手を挙げない子のどちらが好ましいかと言ったら、一般論としては、前者でしょう。ただ、教育現場を預かる立場では、そうとばかりは言えません。活発な子もいれば慎重な子もいる、算数は好きだけれど体操は嫌いという子もいれば、その逆のタイプの子もいる、駆けっこが得意な子もいれば苦手な子もいる、いろんな子がまぎっていたほうがいいのです。そのために入試では、1対1の個別のテストみたいな形を採り入れているわけです。手が挙がらなければ、教師がその子のところには行かない、つまり評価されないというわけではありません。「どう、何かお話しできる？」と話しかけます。手の挙げ方が問題ではなく、何を言えるかが問題なのです。

●事前に練習できないことを質問することも

——面接については、どうお考えですか。

守屋 まあ、親御さんも子どもも事前に練習していますから、よほどのことがないかぎり、面接で不合格とすることはありません。そもそも10分足らずの時間で評価するのはむずかしいのです。というより、我々は面接で保護者の方々を評価しようという気持ちはまったくありません。むしろ、我々のほうが保護者のみなさんからチェックされていると思っています。面接では、ご両親にはいちおう志望理由などをお聞きますが、子どもには、たとえば、「電車に乗ったら1人分の席しか空いていなかった。どうしますか？」など、事前に練習できないようなことを質問することもあります。ほとんどの子どもは「お年寄りに席を譲ります」とパッと答えます。事前に練習していますからね(笑)。

「でも、立っているのは君のお父さんとお母さんと弟の4人だけだよ。誰に座らせる？」と聞きます。たいていは「弟に座させます」と答えま

すが、中には、「僕が座りたい」とか「わからない」という子もいます。こういうときに、そうかで終わらせるのではなく、さらに話を続ける場合もあります。「じゃ、お母さんに座ってもらって、お母さんのお膝に弟が座るといのはどう?」と聞く。「嫌です」「じゃ、お父さんのお膝に弟が座るのは?」「それならいいです」という子もいます。「お兄ちゃんだからできるのは当たり前、お兄ちゃんだから我慢するのよって、いつも言われているのかな」と聞くと、困った顔をする子もいます。

ご両親には、私が何を言いたいかを理解してもらえます。むろん、ご両親に説教しているわけじゃなく、この学校の校長はこういう考え方をする人間なんだとわかってもらいたいです。国立学園に入れば中学受験に有利……そうお考えの保護者も多いと思いますが、そういうふうにしか期待されていないというのは、やはり淋しい(笑)。うちの学校が何を考えているか。そのところもちゃんとわかっていたきたい、そういう意味で面接をさせていただきます。

●インプットだけの教育はしたくない

守屋 話がわき道にそれるかもしれませんが、人工知能の研究をされていた方のレポートを読んだことがあります。人間の脳とコンピューターの違いについて書かれていましたが、コンピューターは入力されたことを、そのままいかに早く正確に出力するか、そういう仕組みになっています。人間の脳は、自分で働きかけをして、そこから学んでいく。そしてその考え方を深めたり広めたりする、そういうような仕組みでできていると書かれていました。

我々の学校は小学校だけですから、中学受験を宿命的に背負っています。今の入試制度を考えると中学受験に限りませんが、手っ取り早く合格させるのであれば、子どもたちの脳を入力依存型の脳にすればいいんです。どんどんインプットさせるだけ。大学の数学の問題だって暗記物ですから。でも僕たちは子どもたちを入力に偏った育て方をしたくない

のです。インプット力だけで偏差値の高い中学に行って、有名大学に入るとい生き方にはやはり脆さを感じます。世の中に出ると、セオリーにないことばかりです。そのつど自分で考え、自分で行動しなければならないのです。自分がどんな状況に置かれているのかを瞬時に判断し、素早く行動しなければならないこともいろいろ出てきます。そうするとインプットされ続けてきた人間には対応できない場合があります。そういう例がいろいろありますよね。

私どもは、中学以後、もっというなら世の中に出た後の生き方を踏まえた指導をする責任があると思っています。これは私個人の考え方ではなく、全教員に共通しているものです。小学校生活6年間で、受験に必要な学力はもちろんですが、それだけでなく、情緒や感性の教育にも力を入れています。1年生から音楽、図工、体育は常勤の専科教師が指導していることからご理解いただけるでしょう。本好きな子ども達が大勢いるのも、これも専任の司書教諭による充実した読書指導があるからだと思っています。

●高学年では国語、算数に専任担当者が2人いる

——5・6年生では、算数担当者が各学年に2人いるそうですね。

守屋 はい。5・6年生には、その学年の算数だけを担当する算数科専任教師が2名つきます。6年生に関しては、国語も同様です。1日の多くの時間を、一人ひとりの子どもの状況についての話し合いに割きますが、専任専科だからこそできることですね。



担当者の数だけ教室があり、多くの場合、1クラスを2つに分けての少人数指導を行っています。即応性が必要な場合、例えば、子ども達のノートをきちんと見て、すぐに返してあげる必要があるときは、1人が授業をやり、もう一人がノート添削に集中するといったこともあります。この2人制が6年生11月からの習熟度別クラス編成による授業でも大いに機能します。

——少人数指導のクラス分けは自己申告ですか。

守屋 ええ、それぞれ自分の習熟度はある程度わかっていますから、もう一度基礎的なところをやり直すグループに入ったほうがいいのか、それとも基礎は十分理解できたと思うから、先に進んだ学習に挑戦したほうがいいのかは、原則として自己申告です。基礎のグループには入りたくない、と妙な見栄をはる子もいるのではないかと思うかもしれませんが、それはありません。むしろ、親御さんが心配されるケースが少ないのです。この時期に基礎グループに入っていて間に合うのかと……。しかし、子どもたちは、自分にとってどちらが大事かというのがわかっていますから、中には、「先生、うちの親を説得してほしい」と言ってくる子もいます(笑)。子どもたちには、自ら考え、学び、行動するという教育方針がしっかりと浸透しているということです。

●中学への合格実績を売り物にはしたくない

——こちらでは中学校訪問を定期的におやりになっているそうですが……。

守屋 毎年、20校から30校ぐらい行っています。その中学校へ行った子どもたちの近況を知りたいためです。そのついでに来年度のこととか、いろいろと情報をいただきます。その両方がねらいです。うちの学校から行った子どもたちがどういう生活をしているかを聞くことによって、その学校に行きたいという話が出てきたときには、適切なアドバイスができます。進路相談のときに、単に偏差値で線を引いて、合格圏内にい

るからとか、校名がよく知られているからとか、そんなことで中学校を選んではしまうと取り返しがつかないことになる。この学校については、これこれ、こうだから、その辺も含めて検討してくださいと、そういう話はさせてもらいます。6年生になって、ここを受けようと思いますと言ってきたときに、私たちが、「あの学校には卒業した〇〇君が行っている。こんなところが楽しいって言っていたな。でも、所在地を考えると通いきれぬかな? ××線経由で行けば何とかかな?」ぐらいのイメージがなければアドバイスはできないと思いますよね。

——御校のホームページには過去5年間の中学合格実績が掲載されていますが、ズラリ難関中学が並んでいますね。

守屋 ええ。ただ、ホームページの目立つところに掲載するとか、垂れ幕で何とか中学校合格何名とか、そういうのは、ちょっと私たちの美学にはありません(笑)。そうはいつでも公開しないというわけもいきません。どういう学校に合格しているのかという程度のことは、みなさん知りたいと思いますから、お知らせしています。有名中学に何人合格したからどうこうという見方はしていません。子どもたちが、進学先を自分で考え、十分納得して、受験した結果です。それらはすべてが成功だと思っています。

——ありがとうございます。